

直方市におけるフットパス活動のこれまでとこれから

Activities for making footpath in Nogata City

廣川 祐司、塩崎 涼音¹、吉村 真琴²、吉村 昌大¹

Yuji HIROKAWA, Suzune SHIOZAKI,

Makoto YOSHIMURA, Masahiro YOSHIMURA

<要旨>

近年、歩く観光まちづくりの手法としてフットパスづくりに取り組む地域が増えてきているが、外部者が地域にどのように関わるべきなのか、地域への入り方、立ち位置の問題など多くの課題が存在する。本論文は、福岡県直方市の地域活性化に寄与するフットパスづくり活動における外部者としての大学生の地域への関わり方について明らかにするものである。ここから得られた大学生の学びや知見は、外部者と地域との望ましい関わり方について、極めて有意義であると考ええる。

<キーワード>

フットパスづくり、外部者、地域との関わり方、大学生の気づきと学び、担い手づくり

1. はじめに

本稿はこれまで約6年間にわたる福岡県直方市のフットパスづくり活動を振り返って、活動の意義と成果を明らかにするものである。北九州市立大学地域創生学群の廣川ゼミでは、「フットパスづくりを通じた歩く観光まちづくり」の調査研究を行っている。このフットパスづくりには、様々な効果があると考えられており、地域の歴史や文化を学ぶことによる地域理解の高まりによって生じるシビックプライドの向上、小学校・中学校・高校などで行う地域学習のためにフットパスづくりを用いることで生じる「フットパスの教育的効果」、さらには新しい観光の形として観光開発の手法としても研究がなされている。さらには、本稿でも深く考察していきたいと考えている、地域において様々な人たちが連携することによって良い効果が生じる「地域づくり」という側面もある。

特に本稿は「外部者である大学生」と「地域住民」との連携の仕方、大学生の地域での立ち位置など、「外部者と地域住民」がどのような関係を構築し、協業体制を生み出すべきなのかについて、明らかにすることを目的の一つとしている。フットパスづくりをする

¹ 地域創生学群3年生、² 地域創生学群2年生

際、地域資源や美しい景観、文化などは長年にわたって、地域住民が日々の日常生活の中で維持・保存してきた貴重な資源である。フットパスづくりをする際は、地域にお邪魔しているという意識と、歩く人たちへ「地域を歩かせて頂く」という気持ちを持つことを注意喚起する必要がある。「地域が主役」という基本的なフットパスづくりのコンセプトを重視すると、外部者である我々大学生だけでフットパスコースを作成することはできず、必ず地域住民の方々と共に活動する必要性が生じてくる。その際、どのような働きかけをするべきか、どのような関係性を構築するべきか、何を担うべきなのかなど、「外部者が地域社会に入り活動するために考えなければならないこと」は極めて多い。地域に入り過ぎて、地域の主体性を阻害したり、逆に地域の慣習的なやり方を壊してしまったりする可能性もある。

したがって、本稿はフットパスづくりという一つの事例をもとに、持続可能な地域づくりのために、外部者と地域の望ましい関係性とはどのようなものなのかについて、深く探究してきたいと思う。

2. 直方市植木地区のこれまで

2.1 活動内容 / (経緯、目的《課題解決に向けた》、具体的な活動頻度等)

私たち、廣川ゼミ直方班が活動している福岡県直方市植木地区では、「歴史的建造物や文化財は多いが、それらが貴重な地域資源として広く認識されていない」という課題があった。そこで、我々は本課題を解決し、地域で文化継承をして行けるようにすることを目的に、地域に住む人が地域の魅力を見つけ、自分たちで情報を発信していけるようにするために、フットパスづくりの活動を行うこととなった。

本活動は、2015年に上記の課題に対して危機意識を有している植木地区の有志の人からはじまり、2017年中間市で開催される予定であった「全国フットパスの集い 2017 in なかま」のオプションルツアーである「なかまフットパスモニターツアー」に参加するなど、近隣のなかまフットパスに参加することでフットパスづくりに関する勉強に取り組んだ。その後、2017年の全国フットパスの集い当日には、1日目の午前中に行われたオプションルツアーとして、当時未完成であった、植木地区の仮フットパスコースにてイベントを実施し、市外から多くのフットパス愛好家たちが植木地区を歩きに来了。その後、2018年、2019年の2年間をかけ、コース作成、体験会、モニターツアー、お披露目会を行い、現在2021年まで続き、直方市植木地区でのフットパス活動は、すでに6年目をむかえている。

廣川ゼミはもともと2014年より中間市役所と協力し、なかまフットパスづくりの活動を行っていた。当時は、中間市の遠賀川水源ポンプ室が世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとして指定される公算が高く、この世界遺産をもとに観光による交流人口の増加を目指している時期であった。しかし、元来中間市は北九州市のベッドタウンとして栄えた町であり、住宅地が多くあまり観光に関しては力を入れてこなかった

自治体である。そのため、観光財源に関しても乏しく、少額で取り組めるフットパスを中間市観光政策の柱として位置づけ活動が始まったのである。我々は中間市と市民団体「なかまガイドの会」と共同で、5つのフットパスコースを作成（2021年度現在合計7つのフットパスコースが存在する）し、「なかまフットパス」がFNQ（フットパスネットワーク九州）による、コース認定を受けるなど、フットパス活動に取り組んでいた。廣川ゼミでは、「なかまフットパスで培ったフットパスのノウハウは、他地域へ汎用性があるのか」について明らかにしたいという思いがあった。その当時、隣の市である直方市役所の職員がなかまフットパスに興味を持ち、「直方市でもフットパスづくりができないか」というご相談を頂く機会を得た。その担当者の方から直方市でフットパスづくりをするのであれば、植木地区が適していると強く推されたことをきっかけに、植木地区へ向かい、地域住民にフットパスについての説明をしたところ、「地域の様々な歴史的な文化財や資源を広く知ってもらうためにフットパスのような活動をしたいと思っていた」という前向きなご意見を頂いた。そのため、正式に2015年度より、直方市植木地区の住民有志の方々とともにフットパスづくりの活動を行うこととなった。

2.2 実施内容

植木地区でのフットパス活動は現在に至るまで、段階的変化を遂げている。

はじめに、2016年度から2017年度の約2年間は地域住民同士や「地域と学生の関係性構築」を進めた。地域の高齢者を対象とした健康サロン「はつらつ倶楽部」（写真1）の活動や地域のイベント「遠賀川いかだフェスタ」（写真2）へ学生が参加することで、外部者である若い人たち（廣川ゼミ生）が日常的に植木にやってくることに對する違和感の解消と、地域の方々の外部者への対応力を身につけていただくための信頼関係醸成の期間である。

さらに我々だけでなく、福岡県立鞍手高校の高校生と連携し、植木地区でのフットパスコースの作成を「地域学習の一環」として取り組んだ。その後、「全国フットパスの集い2017 in なかま」の開催日同日に植木地区のコースもオプションルツアーとして、植木地



写真1 はつらつ倶楽部の様子



写真2 いかだフェスタの様子

区でフットパスイベントを開催した。このフットパスイベントを契機とし、多くの植木地区の住民がフットパスへ興味を持つようになりはじめ、関わる人が増えた。

2018年度から2019年度の約2年間では「フットパスコース作成づくり」が本格的に進んだ。鞍手高校と連携し、作成した仮コースを地域住民が主体となって大学生と一緒にコースのブラッシュアップに取り組んだ。コース作成と同時に、フットパスリーダーの資格を取得している学生と、同じくフットパスリーダーの資格を有する「なかまガイドの会」の方が植木地区の公民館を訪れ、植木地区の地域住民に向けての「ガイド養成講座」を行った。その際には、なかまフットパスガイドの方のお話や、フットパスに関する知識やガイド技術についての学びも行われた。また、地域内で行われる定期的なイベントや活動へ学生も参加し、フットパスの周知や啓発活動を行った。

植木地区で初めて完成したフットパスコースは、「筑前植木みはらしコース」であり植木地区の外周を回り高台から植木地区の全貌が見えるようなコースである。このコースの道探しやマップ作成は地域住民が主体となってすすめ、フットパスを完成させた。筑前植木のフットパスマークには、フットパスの足形の横に植木地区のシンボルである花ノ木堰^{おおいちょう}が描かれている（図1）。2020年2月16日には「筑前植木みはらしコース」のフットパス体験会として位置づけられたフットパスのお披露目会を実施した（写真3、4）。



図1 筑前植木のフットパスマーク



写真3 お披露目会の集合写真



写真4 お披露目会の食事の様子

2020年度から現在にかけては、「フットパスを持続的に行うための組織づくり」を進めている。これまで「フットパス」を全く知らなかった植木地区の住民の中に、少しずつ「フットパスの認知」がされ始め、一部の有志の方のみならず、より多くの住民を巻き込んで地域にフットパスを定着させる段階に入った。そのために、まず「筑前植木みはらしコース」以外にも、新たなコースづくりをしたいという地域住民の声が出てきたことを受け、住民主体での自主的な会議の開催や、コース名の検討などが行われるようになった（写真5、6）。コロナ禍で学生の現地活動が難しかったが、地域内部で話し合いが行われるように電話やオンライン上で促し、「新コースのコース名や体験会スケジュールなどを考えてみませんか」と持ちかけるなどの工夫をおこなった。新コースを仮決定した後、体験会の実施に向けても地域住民を中心に、コース上の関係者への呼びかけ、チラシ作成、体験会当日の食事の準備やガイドの手配まで、地域住民が主体となって準備できるような段階に至ったのである。

植木地区の住民が新たなフットパスコースづくりに主体的にかかわったことによって、地域の方々からは、「連絡・連携の難しさを痛感し、フットパス活動を地域全体での取り組みに変える必要があると感じた」「フットパス活動の持続化を検討することや長期的に取り組むのであれば、組織づくりが必要だ」との課題があがった。今後の植木地区のフットパス活動については、有志の活動ではなく植木地区全体として、地域を挙げてフットパスづくりに取り組むための地域組織づくりをしたいというのが動きが住民たちから出されたことは極めて大きな進展であると感じている。



写真5 ランプリングの様子



写真6 新コース作成に向けた会議の様子

2.3 成果（到達点）／（地域のはじめと現在の変化）

第3節では、これまでの活動から気づいたこと、地域住民の変化について述べていく。2016年から2021年の現在に至るまで、第2節で述べたように「地域と学生の関係性の構築」「フットパスコース作成」「フットパス活動を持続的に行うための組織づくり」と段階的に取り組んでいった。それぞれ段階の変わり目には以下のような変化が起きている。

まず、「地域と学生の関係性構築」と「フットパスコース作成」の期間では、地域の魅

力をうまく言葉にできなかった地域住民が、他者に伝える経験をしたことから、実際に地域内外に発信できるように変化した。地域住民が「鞍手高校生」という地域外の人たちと連携し、フットパスコースを作成したことによって、地域の魅力を他者に伝える経験を得たことから、地域の価値を他者に伝える側へと変化していった。

地域のイベント、取り組みに参加したことでの変化として、大学生が「はつらつ倶楽部」や「遠賀川いかだフェスタ」へ参加したことで、地域住民との信頼関係構築につながった。また、地域内部の資源（ヒトやスポットなど）を知ることにもつながり、フットパス活動外の地域活動の重要性を理解することが出来た。このように一見すると、フットパスづくりには関係ないような地道な地域の方々との繋がりを継続することで、最近では植木地区内を歩いていると、住民の方から「北九大の学生さんよね」「いつもご苦労様」という声をかけていただくことも多くなった。これは我々の活動が、次第に植木地区の住民に認知され、フットパスづくりの活動が地域に定着してきている証左であるといえる。

次に、「フットパスコース作成」「フットパスを持続的に行うための組織づくり」の期間では、今まで一部の有志による活動だったため、このままでは属人的な運営になること、特定の一個人に負担が偏る危険性があることから、地域住民の中から地域として、正式なフットパス活動に取り組むための組織づくりをしようという提案が地域側からなされた。このことから、地域住民が主体的に考える変化が起きたことがわかる。これは、フットパス活動が地域内で持続可能な活動に向かうための大きな変化である。さらに、植木地区でのフットパスお披露目会に、隣町の植木市新入地区からの参加者が多くいたことで、新入地区でもフットパスづくりをしてみたいという声上がり、直方市の中で少しずつフットパス活動が広がりを見せている。

2.4 学生の学び / (学生の変化、成長、地域活動の変化等)

これまでの活動から、我々大学生は「フットパスを地域に定着させていくための汎用的な方法」についての学びを得ることができた。まずは「地域の人が自分たちで地域に埋没している魅力的な資源を再発見し、誇りをもって自分たちで発信していく」ことが必要であるということである。そのためには、外部者である我々大学生が、その潜在的な地域資源の価値について、正しく評価し、地域側へ伝える責務があることがわかった。我々の外部者の声を地域住民の皆さんが真摯に聞き入れてくれ、その地域資源を活用したり、発信したりしようという気持ちになっていただくためには、地域住民との信頼関係の構築が必要である。そのため、活動の初期段階では、地域に馴染むために外部者である大学生は、フットパスづくりとは一見関係ないような活動であっても、すでに植木地区で行われている地域活動に参加し、地域住民との信頼関係を構築していくことが必要なのではないだろうか。そして植木地区の方々が段階的な変化を遂げるごとに、大学生の立ち位置として、「フットパスづくりに一緒に取り組む人」から「住民主体でフットパスづくりをする際にサポートする人」へと変化してきたといえる。重要なのは、地区の現状や特徴に応じて、外部者

である大学生の望ましい立ち位置を変化させて取り組んでいく力が必要なのである。地域住民の主体性が発揚するにしたがって、地域の中で持続可能なフットパス活動への気持ちが高まり、地域のフットパス活動に取り組むための組織づくりをするべきだという声が高まった。お隣の新入地区でもフットパス活動がはじまったこともあり、今後は植木地区内での正式に自治会活動として植木フットパスが定着し、新入地区との地域間連携が発展していくことが期待される。

3. 直方市新入地区のこれまで

3.1 活動内容 / (経緯《植木地区でのフットパスイベント参加からのつながり》、

目的《課題解決に向けた》、具体的な活動頻度等)

2020年10月から植木地区に続き、新入地区でも地域住民とのフットパスづくりの活動が始まった。近年、直方市では市内の小中学校区単位で「まちづくり協議会（以下、まち協）」の設立を目指してきた。このまち協単位でのまちづくり活動は、近郊の北九州市や中間市など、北部九州の自治体では積極的に取り入れられている手法である。新入小学校がある新入地区では、この直方市のまち協の設立を念頭に、地域のまちづくり活動を推進する組織として「新入地区活性化企画部」を立ち上げた。しかし、設立当初、具体的なまちづくり活動が定まっていなかった時期に、お隣の植木地区において、我々と住民とが協業してフットパスイベントが実施された。2020年2月16日に開催された植木地区の「みはらしコース」のお披露目に、「直方市自治区公民館連合会（以下、自公連）」の会長、事務局長を始め多くの役員が参加したことが、新入でフットパスづくり活動を始める大きなきっかけとなったのである。

その後、自公連の会長と事務局長が「新入小中学校区」からの選出であったこと、すでに一足先にフットパスづくりに取り組んでいる植木小中学校区の代表が自公連の副会長を務めていたことから、新入地区でもフットパスづくりを始めようという機運が高まったのである。その中でも、新入地区におけるフットパス活動において中心的立場となったのが、自公連の事務局長を務めるK氏である。K氏はフットパスづくりを通し、低コストでまちの魅力を見つけることができるフットパス活動が新入地区におけるまちづくり活動の柱としてぴったりではないかと考え、植木地区でフットパスづくりに積極的に取り組んできた植木地区のM氏に新入地区でもフットパス活動を行ってみたいと相談があり、M氏を通じて我々廣川ゼミと繋がったのである。

この新入地区には以下の大きく4つの抱える課題があった。

1. 自治区、公民館の加入率をどのようにしてあげるかについて
2. 防災・防犯について
3. 地域の福祉について

4. 環境について

これらの新入地区の課題については、まずは「地域の実情を理解し、地域にはどのような資源があるのか、歴史や文化を正しく認識することによって、住民のシビックプライドを高め、地域コミュニティへの帰属意識を高めていけるような活動」を展開することが、まちづくり活動の第一歩であると考えていた。そのため、新入地区のまちづくり活動を促進するためにも、新入地区の6つある公民館長のみならず、地区の消防団員などの地区の若手にも、この新入のまちづくり活動参加してもらいたいと考え、「新入地区活性化企画部」を発足した。この活性化企画部の活動の支援部隊として消防団の方々を入れ若い人達を巻き込み、新入地区に6つある公民館の内、最も若い天神公民館の館長を企画部長として抜擢した。しかし、先に述べたように、発足当時の活性化企画部では何を行うか悩んでいるという状態であったということである。

また、新入地区には歴史的に貴重な史跡が多数保存されており、魅力的な箇所を皆で歩きたいという地域側の声もあがった。さらには上記した4つの課題についても、地域内の様々な道や地形などを理解している住民が増えれば、地域の防災や地域環境の理解にも寄与するし、地域の方々がフットパス活動に興味を持ち、活動が活発化していけば、住民同士の繋がりもより濃密になり、日常的な繋がりの中から防犯や地域福祉の向上にも良い効果を及ぼすと考えたのである。このような背景から、新入地区ではフットパスをまちづくりの手法として用いる運びとなった。

新入地区におけるフットパス活動の目的は大きく3つある。1つ目は、新入地区には史跡などが数多くあるため、それを活かしたフットパスコースを作成し、地区内外の人に周知すること。2つ目は、地域全体で集まる機会をつくること。3つ目は、これらを踏まえ新入地区が抱える問題解決にフットパスづくりを活用することが有効であること。

これらの3つの目的を達成するべく、月に1回は学生と地域住民とのミーティング（写真7、8）し、月に2回は地域のランプリング（写真9、10）を行うことを基本的な活動としている。



写真7 新入地区フットパスの会議の様子



写真8 新入地区フットパス会議の様子



写真9 新入地区フットパスのランプリングの様子



写真10 新入地区フットパスのランプリングの様子

新入地区におけるフットパス活動の特徴は大きく2つある。1つ目はお隣の植木地区と異なり、地区内の有志によるフットパスづくりではなく、地区内でフットパスづくりを中心的に担う「新入地区活性化企画部」という地域組織が存在するという点である。新入校区活性化企画部は顧問、部長、事務局、支援グループに分かれており、各公民館館長が所属するだけでなく、消防団員も支援グループとして入ることによって多世代の方々での活動となっている。

2つ目は、隣町の植木地区の活動を見てきていることから、フットパスづくりの活動のイメージをある程度持った状態で活動が始まっているという事である。2章で述べたように植木地区では地域に入り込むところから始まり、1から地域の方と外部者である我々大学生が信頼関係を構築しながら、一緒に作り上げるという活動スタンスで臨んできた。一方、新入地区では我々大学生に対して、フットパスコースづくりを教えてほしいというお声掛けで活動が始まったため学生は外部者としてアドバイザーの立場で活動に取り組んでいる。

3.2 実施内容

2節では更に新入地区におけるフットパス活動について記述していく。新入地区における主なコースづくりの流れは以下の通りである。まず第1ステップとしては、フットパスコースを決めるために、フットパスづくりに関わる中心人物たちが定期的に候補となる道を探し、地域に埋没した魅力的な地域資源の発掘作業を行う。その際、我々大学生のような連携者が、多世代の視点や外部者からの評価を地域に伝えながら行うことが望ましい。その活動を1年近くの年月をかけ、ゆっくりと何度も調査や協議を行うことで、新入フットパスの理想像や目指すべきフットパス像が共有されていくのである。

そして、次の第2ステップの段階としては、ある程度、仮のフットパスコースができたら、地域の人を対象に体験会を行うことである。体験会とは、地域住民の皆さんに「フットパス」というものを理解してもらい、外部からセルフランプリングにやってくる地域へ

の訪問者があった際、地域住民が理解を示してもらうために必要な過程である。つまりは、地域内への「フットパスの周知」のために必要な過程なのである。また、ガイドの練習や参加者からのコースやガイドに関するアンケートを行うことを目的としており、これをもとにイベントの流れ、コース、ガイド方法について改善していくこともできる。

さらに次の第3ステップとしては、地域外の方も参加対象に含めたモニターツアーを行うことである。これはフットパスを地域の内部で内輪的に楽しむものではなく、外から歩きにきた人、つまりは外部者の客観的な評価を得るために実施されるものである。この外部者からの評価や指摘を受けて、更なるフットパスづくりの改善を行うのである。この過程は外部者からのフィードバックを得る過程であり、新入フットパスをより魅力的なものにするためのものといえる。そして最後の第4ステップとして、マップを作成し、道標などのコースの目印、ガイドの養成、地域のお母さま方などのフットパスを行う上での支援組織の充実などを行って、最終的に完成したフットパスコースのお披露目を開催するのである。

新入地区における主な活動日程は以下の通りである。

2020年10月30日：ミーティング（地域住民と大学生との顔合わせ）

2021年3月20日：ランブリング調査

2021年4月24日：ミーティング（新2年生の紹介、3月のランブリングをもとにしたコース確認）、ランブリング

2021年6月26日：ミーティング

2021年7月24日：ランブリング調査（コースを全部歩いてみる）

2021年9月25日：オンラインミーティング

2021年10月23日：ミーティング、ランブリング調査

〈今後の予定〉

・2021年3月6日（日）9:30～

地域住民向けの体験会開催予定

・来年度4月以降 モニターツアーの実施

まず、2020年10月30日初めてご連絡をくださったK氏と大学生のミーティングを行い、顔合わせをはじめ、新入地区の現状・課題を確認し廣川ゼミのフットパス活動や魅力、新入地区でフットパスを行う理由等を確認した。

2021年3月20日には、初めてのランブリング調査を行い、まちなかをメインに歩いた。この際、地域の方が事前にスポットなどを調べてくれていたためそれをもとに歩くことができた。

年度をまたいだ2021年4月24日、ゼミ活動に新2年生が加わり、再度教員から北九州市立大学地域創生学群の紹介を行い、今後のスケジュールに関するマスタープランのご提案をし、「新入地区にフットパスコースを1つ作成し、地域住民向けにフットパス体験

会を実施する」ことを2021年度の目標として地域側との共通認識とした。これはまず地域内の方々に新入地区でフットパス活動が行われている事を認知して頂くことを第一義的な目的としたためである。しかし、その後、新型コロナウイルスのまん延により、福岡県内は緊急事態宣言発令がされてしまった。その期間はオンラインによる会議を地域側と行っていたが、大学生にとって想定外だったのは、大学生が来なくとも地域の方々が少人数で集まり地域を歩き回り、次の会議時には新たな提案をしてきてくれたことである。これは大学生にとって嬉しい誤算であり、改めて新入地区の皆さんのフットパスにかける思いの強さを知る機会となった。

緊急事態宣言が発令されている期間外は毎月大学生も新入へランブリング調査行いに通い、地域の方々とともにコース上のスポットや道の調査を行った。公式的な月1回の活動以外にも、地域住民のみでランブリング調査やミーティングも定期的に行われており報告も行ってきた。我々の想定をこえ新入地区の皆さんは、フットパスづくりに前向きに励んでおり、現在、地域の方が新たに2つのコースをご提案してくれたのである（図2、3）。魅力的な地域資源スポットや歩いて楽しい小径や美しい景観、由緒ある寺社仏閣など、2つのご提案頂いたコースの内、どちらを今年度の新入フットパス体験会のコースとして取り上げるか、非常に悩ましい展開となっている。

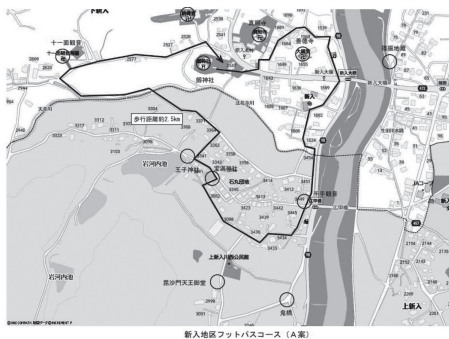


図2 新たに提案されたコース①

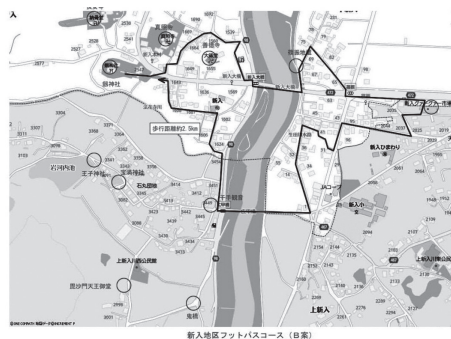


図3 新たに提案されたコース②

体験会に向け活動が進む中、現在、地域外への広報として大きく3つ行う予定となっている。1つ目は市報に新入フットパスのお知らせを掲載することである。2つ目は、12月に行われるまちづくり協議会でのプレゼンテーションである。新入地区でフットパスづくりの中心的人物であり、自公連事務局長のK氏が出席される予定の会議に、大学生から新入地区におけるフットパス活動をはじめ廣川ゼミの活動を発表してはどうか、とK氏からお声掛けがあった。3つ目は、市長も出席する直方市議会の一般質問に、直方市におけるフットパス活動の支援を行政としてもするべきであると考えるのいかかが、という内容の質疑応答がなされたことが報道されたことである。新入フットパスの主要関係者で新入小学校区の6つある公民館の館長の1人は、市議会議員を務められておられ、その方が我々とフットパスづくりの活動をする中で、フットパス活動の意義や効果について深く感

銘を受けていただいたために生じた現象である。公民館長をも務める市議会議員さんは、我々とのミーティングの際により直方市が行政としてバックアップをしてもらい、直方市の全ての地区でフットパスづくりが展開できたら良いとお話してくださり、市議会での一般質問内容を共有してくださった。4つ目は地域内の新入小学校区の自治区の会議にてフットパス活動をお知らせしてくださるという事である。ここでは、1つ目で記述したチラシも配布することとなっている。

3.3 成果（到達点） / （地域のはじめと現在の変化）

もともと 2021 年度の新入地区の目標として「新入地区にフットパスコースを1つ作成し、地域住民向けにフットパス体験会を実施する」ということを掲げていた。しかし、新入地区の皆さんは非常に積極的に活動に参加してくださっており、地域の方だけのミーティング、ランブリング調査を行いながら、自主的に調べたり行すべきことを提案したりしてくださっている。このように地域の方の非常にポテンシャルが高く、初めて参加する方が少しずついっしょに、体験会に向けてより一層のフットパス活動の認知度が高まり、地区内の関係者増加が目に見えて成果を上げてきている。また、目立つ色の服を着て歩くことや、直方自治区公民館連合会の旗を作成し、それを持ってランブリングを行ったりして、歩く姿を多くの地域住民に見えるように活動の可視化に努めてくれている（写真 11, 12）。従って、新入地区におけるフットパスづくりは、福岡県に2度の緊急事態宣言が発令され、活動が一時停滞した時期があっても、順調に推移し、3月に体験会を開催予定とし活動を進めている。



写真 11 目立つ色の服を着用されている



写真 12 旗を持って歩く様子

3.4 学生の学び / （学生の変化、成長、地域活動の変化等）

新入地区での活動で、「組織の重要性」を理解することができた。今まで、植木地区のフットパス活動は、大学生が植木地区内の様々な地域団体の活動の中で知り合ってきた地域の方々が有志で集まってくれ、植木フットパスづくりを行ってきた。それに対して、新入は「新入校区活性化企画部」という組織をフットパス以前から構築していた。自公連会

長の T 氏のもと、各公民館長・公民館主事・消防団などの地域に影響力を有する重要な役割を持つ方で構成され、自公連の事務局長の K 氏（新入地区の 6 つある公民館の 1 つの館長も兼ねる）から各位に重要事項を伝える連絡網もある。

この地域において組織的動けることの良さは 2 つあると私たちは感じている。1 つは連絡漏れが少ないこと。誰かが会議に参加しない日があっても、連絡網により確実に情報共有することができている。もう 1 つは責任の所在が明確であり、意思決定がスムーズに行えているという点である。ボランティアでのまちづくりと違い、組織体制を強固にすることで、誰が、何を、いつまでにしなければいけないのかが明確になっている。実際に新入地区と植木地区とでは、学生と地域間の連絡の取り方や連絡事項の説明の仕方などで違いがある。その違いが生じる理由はこの「組織化されているか否か」の差が大きく関係しているのではないかと考える。また、地域の方が非常に積極的に活動してくださるため、その分変更が度々生まれる。高い意欲を持った地域の方のモチベーションをフットパスづくりに活かすためにも、変更を把握し対応できるようにと学生間での確認や意見出し、実際に地域に足を運ぶ回数を増やすといった活動の変化も感じている。

植木地区との活動の比較を行う中で学んだことは、「地域の実情に合わせた外部者としての学生の立ち位置の違い」と「フットパスの根付かせ方の違い」である。第 3 章 1 節で述べたように、新入地区への学生の関わり方は、あくまで外部者としてフットパスづくりに関するアドバイザー的立場で関わらせて頂いている。これは地域側からのコースづくりを教えてほしいという依頼から活動が始まり、かつ地域側に自立的に活動できる組織があるため学生が深く入り込む必要がないためである。また、新入地区におけるフットパスの根付かせ方は、活性化企画部という活動を中心に行っている人・団体が明確であり、そこに関わっている人の知人や歩いている際に会話する人たちに認知されていくという形で広がりを見せている。これは、植木地区におけるフットパス活動の根付かせ方とは異なっていることが分かる。

これらのことから同じ市町村であるからといって、どの地域でも成功するフットパス活動の型があるわけではなく、取り組む地域によって違うことを学んだ。しかし、この新入地区でのフットパスの広がりや、植木地区における 5 年間にわたる地道なフットパスづくりの関係性があったからだと感じている。植木地区において、地域でフットパスづくりに関心を持って下さる有志の方々が、我々との活動に飽きず、フットパスコースと一緒に作るとともに作り上げ、外部者であり、世代も立場も異なる我々を、フットパスづくりをする同じ仲間として、ずっと寄り添いながら活動を続けてくれたからに他ならない。その植木フットパスの取り組みがあったからこそ、新入地区においても、自分たち地域でフットパス活動を展開したいという声が上がったのである。これからは、植木地区がフットパスづくりのノウハウを教え、新入地区が地域内で持続的に活動できる組織作りの手法を教え、相互で教え教えられる関係性として、直方市内でフットパスをより魅力的なコースとして地域に定着していけるように、我々も共に頑張りたい。

4. おわりに

福岡県直方市でのフットパスづくりの活動は、2021 年で 6 年目を迎えている。当初はここまで直方市での活動が長く続くとは思っていなかった。廣川ゼミで行政と連携してフットパスづくりに初めて取り組んだのはお隣の間門市である。間門市ではフットパスを観光政策の柱と位置づけ、に市民団体である「なかまガイドの会」と間門市世界遺産推進室（当時）と廣川ゼミが 3 人 4 脚体制で「なかまフットパス」づくりを行ってきた。当時の直方市は、あまりフットパスづくりには興味を示さず、間門市と同じ取り組みをした所で、注目されることはないという評価であった。そのため、植木地区の方々はフットパスづくりに熱意をもって取り組んでくれていたが、十分な行政との繋がりが無い以上、いつかは行き詰まりを見せるのではないかという、漠然とした不安感があった。

しかし、本論文でまとめてきたように、植木地区の皆さんは大学生と一緒にフットパスづくりに取り組み、福岡県立鞍手高校の高校生にもフットパスづくりのレクチャーを行ってくれた。その成果として、「筑前植木みはらしコース」を作り上げ、植木フットパスの PR のために体験会やお披露目会などのフットパスイベントも主体的に開催してくれた。ガイド役や地域内での調整など、積極的にフットパスづくりに取り組んで頂き、今では「この道はフットパスらしくないな」や、「フットパスガイドとしては、しゃべりすぎだよ」などという会話を住民同士でするようにまでなった。

さらに転機となったのは、植木地区のフットパスイベントに参加した新入地区の方々が、「新入地区でもフットパスづくりを始めたい」と申し出て頂けたことである。幸いなことに、新入地区の公民館の館長たちの中に、自公連の会長や事務局長、それに市議会議員さんがいらっしゃったことで、直方市全域を対象とした広がりを見せつつある。新入地区のフットパスづくりは非常に組織だっており、高い自治力を発揮して極めて自立性の高い状態でフットパスづくりに取り組んでいる。隣り合う同じ自治体の中でも、「外部者である大学生の担うべき役割」に大きな違いがある。我々大学側の学びとしては、外部者が地域に入り込む際、その立ち位置は決して一様ではないという点である。フットパスの理念や「地域が主役である」という考え方は、統一的なものであるが、地域でフットパスづくりの手順は定型的なものを地域にはめ込めば良いというわけではないことに気づくことができた。

最後に、ではフットパスづくりは各地域の実情に合わせて「臨機応変に取り組めばよい」のかと言われれば、私はいささか違和感を持つだろう。確かに地域資源や担い手の有無、地域のまとまりなど、各地域で異なるが、その場にあわせて臨機応変にというよりは、多様な作り方マニュアルを複数用意しておき、活動地域に合わせて選択ができるようになれば良いと考えている。つまり、臨機応変とは決して行き当たりばったりではなく、そのシーンに合わせて最も適するマニュアルを見つけ出す力なのではないかと考えている。そのためにも、多様な地域で様々なフットパスづくりの手法を集積し、体系化を今後ますます進めていきたいと考えている。